第12号
昭和63年３月

会　報

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北１条西17丁目 電話011－644－4025

子どもと親の美術館'88会場風景

ESSAY

海外雑感

北海道立旭川美術館長　磯　部　　保

島国に住む私たち日本人は、一般的にいって、外国へ出かけたり、外国人と話し合ってみて、初めて我が国のよさや日本人としての問題点を感じる場合が多いのではないだろうか。私の場合もご他聞にもれず、かつて日本を離れてみて、初めて我が国や日本人の在り方について考えさせられた。

ユーゴースラビアに一週間ほど、滞在したことがある。この国は、国内に6つの共和国、5つの民族、4つの言語、3つの宗教、2つの異なった文字が、それぞれ公認されている。このことは、ユーゴスラビアが全国民の平等の原則に基づいて、各民族独自の言語の使用や芸術文化の発展などを認めているのは当然のこととはいえ、一方、共和国全体で調整しなければならない問題については、障害や隘路があるのではないかと想像された。

これに比べて、我が国の場合は、全国どこへ行っても、言語や文化、慣習などで、何らの障害もなく、さまざまな意見を自由に述べられる我が国のよさを、しみじみと感じさせられた。

次に、ユーゴスラビアから、バスでイタリアへ移動した。バスで国境を越えたのである。我が国の場合、周りがすべて海であるので、なかなか国境という言葉の実感がわいてこない。ところが、ユーゴスラビアは、何と7か国と陸続きであり、そのためかどうか有史以来、他国や他民族との抗争に明け暮れた歴史の上に存在しているといえるが、国境といっても、道路に税関を設けて出入国をチェックする程度で、自然条件は隣接する国と何ら変わりはない。このため、ユーゴスラビアはもち論のこと、ヨーロッパ大陸の国々では、人々が他民族との接触によって、いかに他民族を理解し、共存の道を探っていくのかということと同時に、国民としての国家意識をどう育てるかが最大の課題であり、この意識が育たない限り、国そのものの存在が危うくなると感じた。

これに対して、我が国の場合は、島国といえ他国から離れた自然や風土の中で、多数の民族との共同生活や異質の文化との共存がないままに、同質の文化に親しむだけで、こと足りてきた。それだけに、私の場合、海外へ出かけ、外国人と話し合ってみて、初めて、日本人として、自国の歴史や文化についての確かな認識が不十分であったことが分かり、日本人として独自性を発揮できなかったことを反省させられた。

次に、日程の関係で、イギリス、イタリア、フランスは駈け足で通り過ぎた。それにしても、この3つの国をとおして共通的に考えさせられたことは、歴史とか芸術などを尊重し、心の糧にする人間の生き方についてである。

例えば、巨大なポンペイの遺跡や古代ローマの遺跡、ウインザー城やヴェルサイユ宮殿、そして、大英博物館やルーブル美術館などに代表される幾多の文化遺産は、歴史の重みを感じさせるとともに、これらの文化遺産を自国の誇りとして継承し、更に、新しい文化の創造への営み、つまり、歴史の継続性の中で、人間が育っていく生き方は学ぶに価すると感じた。

つまり、内容を吟味しないままに新しいものを追うのではなくて、古くても見直しながら、その中に人間としての豊かさを求めていくといった感じである。

これに対して、我が国の場合、明治以来、急速に近代国家として発展した結果、特に最近は、物質的に豊かにはなったが、精神的には何か満たされないままに、利己主義に走りがちではなかろうか。それゆえ、歴史への回帰とか、日本の文化や芸術の特色を改めて見直す中で、自国について誇りのもてるものへの自己学習の必要性を痛感するとともに、今後は、国際的に信頼される日本人として、何を人生の価値基準として、どう生きればよいのか、その在り方について、考えさせられた次第である。

ミケランジェロ「モーゼ」の大理石像（ローマにて）

……62年度婦人美術講座に参加して

美術講座を終えて

渡　辺　玲　子

絵が好きと云うだけで、今迄色々な美術館や、催し物を見てきましたが、今回、美術講座を受講する機会に恵まれました。かけ足で美術史を勉強する、と云う感じもありましたが、鑑賞する上で、手がかりとなる事も多く、楽しく勉強する事が出来ました。絵に限らず、色々な作品を鑑賞する時、こちらのレベルに依って、作品から受ける印象が違ってくるのは若い時と、今と、同じ作品を見ても、受ける感じが違っている事で、経験しているのですが、特に、日本の画壇についての知識や、時代の流れに依って、作者の画風の推移を知る事が出来たり、講義の中で見せて頂いたスライドの作品を、里帰りのついでに、実際に見る事が出来たり、自分なりに、ふくらませる事が出来ました。又趣味を同じくする人を、友とする事が出来たのも、大きな収かくです。このような、講座が長く続き、沢山の人が受講出来ます事を希望しております。

余談になりますが、3年程、転勤で名古屋に行き、1年少し前に戻ったのですが、引越荷物も一段落着いたある雪の日、久しぶりに美術館を訪れました。そして、何年か前の〝佐藤忠良展〟で印象的だった作品“Boutons”と思いがけなく出会ったのです。それは旧友にでも出会ったような懐しさでした。うつむいて、マントのボタンをかけている少女の無駄の無いシルエットと清純な雰囲気、どことなく、フランス的で洗練された感じのする、佐藤忠良の作品は大好きです（又、留守の間に出来た、芸術の森美術館に、数点の作品が展示されているのも、嬉しいかぎりです）。

そして、ホットな気持で出口から、ロビーに出たとたん、今度は、急に降り出した雪が風に舞って、桜の花吹雪にも似た華やかさで、目に飛び込んできたのです。たまたま誰も居ないロビーの、あの広いガラス窓一杯に踊る雪は、暫く雪から遠ざかっていた目には、とても新鮮で、華やかで、一人で見るのは、もったいないような景色でした。

過去…未来へのメッセージ…！

堀　　喜　子

学習も、パーフェクト終了、幾度もハイヤーを飛ばし、それまでして受ける意義があるのかな……と思いつつ、講師陣の熱の入った講義が進むにつれて、≪人間の歩んできた道しるべ≫に触れるたび、スライドを見ながら、その時代にタイムスリップする感覚さえ覚え。

皆勤としていただいた、ガラスの文鎮を手にした時は…ん、無事終了！

美術館へ足を運ぶキッカケとなった、母の実家から貰らって来た,古い6枚屏風の書、2本の筆で書いたような、又そうでないような！輪郭を取るように、真中がぼけて抜けた文字､中国から伝わってきな書とも言われ…？

横に明治参拾八年大ニ運ト連合セス、松前藩㊞、及木豊之敬と書いてあり、そのルーツを探るべく、私の中の好奇心が、歴史の旅をしてみようと美術講座へと足を踏入れ始め。日本・西洋の美術史・現在・北海道美術史・美術鑑賞……など広範囲に亙る内容の豊富さに私の美術鑑賞は…？%なのかなと、知識の乏しさ、歴史的背景の奥深さも改めて感じます。

人が生きている所に文化が生まれ、歴史が生まれ、いつの時代にも、人と人と4関わり作品を通して作家の訴えようとする心の格闘・荒廃の中から生まれ出る、生命感・人間生命・芸術観・それぞれの生き方も時代を越えて同じように感じます。

昔話の枯木に花を咲かせる、花咲かじいさんは、現代の世に、光の芸術・イルミネ。ションファンタジーの世界を創り。

過去から、現在・未来へ向けて伝えられようとしている、復活のメッセージとともに、現在に大きく関わり、役割を果すべく未来への掛橋なのだと思いますが…！

美術の歴史を通して世界の文化（科学）の流れ・人間の生活様式・生活意識を垣間見る事ができるのかも知れません、その不思議さにもう少し触れていたいと思います。

私の知識の乏しさ、耳聞を広める為にも。

海外旅行記

「実感」の旅より

上　出　志　津

寒くうす暗い古都西安を後にして着いた北京はぬけるような青空が広がっていた。桂林、西安と天候にはやや恵まれなかったのでとりわけその明るさは心に泌みた。

ニュースで度々みる天安門広場。バスから下りたった時、我々は一様に嘆声とも溜息ともつかない声をあげた。いいようもない凛とした冷気が広場にみちていた。

人が小さくみえる向い側、東方、西方に堂々と建っている歴史博物館、毛沢東記念堂、人民大会堂、大きく赤字で書かれているスローガン。大勢の人が散策していたが広さが人を吸いこんでいるかのようだった。

帰札後この天安門の上から広場をみわたせるようになったというニュースをみた。私の脳裡にこの広場が実感として甦った。

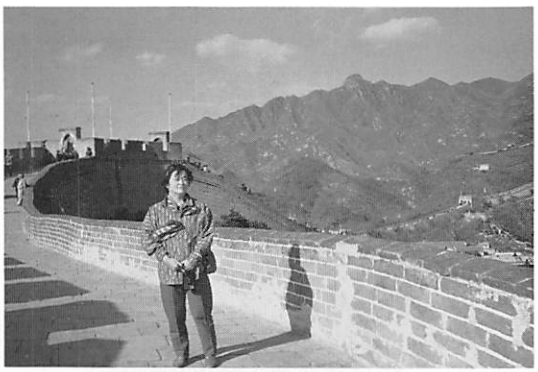
中国は広い、中国は古い、中国は……と色々のことを耳にしながら私はこの地を訪れてそのいずれもを実感として味わった。旅をするということはこれだ、と思った。

「万里の長城」も以前からよく耳にし写真でもみて行かなくても一つの絵になっていた。だが、その場に行った時、砦の道をわたる風、沢山の人が歩き踏み固めた道の色、少しくずれた城壁のさびた茶色、そして見遙かす八達嶺に浮ぶ雲の白さは新鮮なものとして心の中の絵をぬりかえた。2千年もの昔、10年の歳月をかけて30万人の人がどんな条件の下に営々と働いたのか。風雪にたえて残っているこの道に私はただの観光客の1人として佇っている。

褐色に統一された風景はそれを際立たせる青空の美しさと共に忘れ難い。

旅で得た実感はこれからの人生に広がりをもたせてくれるだろう。

天候、道づれ、健康、旅の印象は色々なものに左右される。始めての海外旅行中国訪問がすべてに恵まれたことを感謝する。



万歩計のつぶや記

—中国美の探訪—

棟（とう）　徹　夫

なにやら意味不明の表題で恐縮ですが、今回の中国ツァーのメンバーならば、そこはかとない擽りを感ずるとともに、思わずニヤリとなさることでしょう。はからずもお役に立ち、美の探訪に「科学的」な彩りを添えるはめになり、日々皆さんのマスコットとして可愛がられ（？）た、あの万歩計のかそけきつぶや記をお届けします。最も近くにありながらまだまだ知られていない中国の姿を、ほんの10日間垣間見た旅行でしたが、いろんな意味で素晴らしい旅行でした。本当のところ、その感銘の深さは、言葉に出してしまうと、すーっとエーテルのように透明に昇華してしまい、色調のない吐息となって胸にくぐもって、かえってうら寂しくなってしまうほど強いものでした。中国の美を探訪することが中国数千年の歴史を実感することと、こんなにも一体となるものは、予想をはるかに超えるものでした。何処がよかった、此処がよかったなど、その一つ一つについてあげつらう力は到底私にはありません。感動はそれぞれの人の心のなかに花開いたことと思います。訪れた幾つもの名所旧蹟夢幻境を想わせる自然美、ぎりぎりな巧みの粋をこらした造形美。訪れた博物館、美術館のほのぐらい（設備体裁は必ずしも整っているとは言いがたい）しじまに佇って、陳列された一つ一つに対面した時、それらの文物を造らせた歴代支配者のすさまじいまでの権力エネルギーに圧倒されそうになるとともに、工学技術の道を辿った私にとっては、それらに打ち克つ何倍もの力の結晶として鏤めあげた、無数の工人、技術者（芸術家）の豊かな夢とほほえみが、涙となって迸るようにじんわりと伝って来ました。むしろうす暗い陳列室のしめりを帯びた雰囲気がそれを助長するように思えて来るのでした。

西安からややかさばる兵馬俑の置物を4体もはるばる背負って帰って来ました。荷ほどきしたままの乱雑な部屋に、やや呆けたように坐りこんだ私の胸にふっと湧いた拙い句でこの文を締めくくらせていただきます。

「兵馬俑手触れば笑みのかそけくも」

北京頤和園石船

美術館ニュース

北海道立近代美術館

昨年は開館10周年記念に加え、開館以来の観覧者が300万人を超えるなど、北海道立近代美術館にとって大きな節目となった年であった。これまでの館の実績をふまえ、昭和63年度も引き続きバラエティーに富んだ展覧会を用意して、新たなスタートを切る予定である。

まず常設展では、これまで収集した約2,600点のコレクションの中から、年間5期に分けて展示していくが、そのつど150〜200点の出品作品によって多面的に、そして魅力あるコーナーを設けて展覧していく予定である。その第1期（4月1日〜5月22日）は、前年度に収蔵された作品を一堂に公開する「新収蔵品展」。エコール・ド・パリの旗手の1人のユトリロ・アール・デコ期を代表するモーリス・マリノやル・ネラリツの作品、そして川多賀の大作や松樹路人の油彩など。また近年注目を浴びつつある蛎崎波響の晩年の屏風「花鳥人物屏風」も展示される。

第2期以降その主なコーナーを紹介すると、5月26日〜7月26日の第2期では1階全フロァーを使って開催される「アメリカン・ポートレート展」。第3期（7月30日〜10月2日）は「食を彩る——テーブルウエァー」が組まれるが、これは6月3日から〝食〟をテーマに開かれる「世界・食の祭展」と連動するもの。第4期（10月6日〜12月2日）は「パスキンの世界」。第5期（1月5日〜3月28日）は「ガラスの美＝アール・デコと現代」が開かれる。

さて、特別展は、合計9本開催の予定である。まずその第1は「東京芸術大学所蔵名作展」（4月2日〜4月29日）。昨年東京芸術大学はその前身東京美術学校の設立以来100周年を迎えたが、本展はそれを記念して開かれる。同大学は明治・大正・昭和の3代にわたって多くの美術家を育ててきたが、一方で国宝や重要文化財を含むすぐれた作品も収集している。本展ではその中から精選された狩野芳崖「非母観音」（重文）、高橋由一「鮭」（重文）など広く知られた名作が紹介される。

悲母観音　狩野芳崖

5月には道産子シリーズの「小川原脩展」（5月3日〜5月22日）が始まる。小川原脩は倶知安在住で、戦前にシュールリアリズムの洗礼を受け、戦前の重要な前衛美術運動の担い手の一人として活躍し、戦後は全道展創立会員になるなど、本道美術界に指導的役割を果した。本道はその60年におよぶ彼の画業を回顧するものである。引き続き開催される展覧会は、インド祭の一環として開かれる「宮廷衣装の美・インド＝マハラジャの栄光展」（6月16日〜7月17日）。19世紀から今世紀初頭、インド各地に君臨したマハラジャ（藩主）たちの生活の中に開花した染織工芸ならびに装身具・調度品の数々を紹介し、マハラジャの栄光を伝えるスケールの大きな展覧会である。

盛夏の季節には「第3回世界現代ガラス展」（7月30日〜9月4日）が開かれる。トリエンナーレ形式で開かれるこの国際コンペもすでに3回目。すでに出品作家のノミネートは終わり、コンクール部門12ケ国50作家、特別招待部門10ケ国20作家の出品が決まっている。限りない可能性を秘めたガラス芸術の美しさ、面白さがまた繰りひろげられることだろう。その後は「浮世絵200年展」（10月8日〜11月13日）。浮世絵のすぐれた収集で知られる高橋誠一郎コレクションのうち、慶応義塾に収蔵されたものの中から約370点を厳選して浮世絵200年の歴史をたどるものである。菱川師宣をはじめ、歌麿、北斎、写楽など不世出の浮世絵師たちの代表作が一堂に展観される。

このほか「子どもと親の美術館」（1月5日〜1月29日）、「サマー・ミュージアム'88」（7月30日〜8月14日）など恒例の子どもを対象にした展覧会、特別所蔵品展「版画の世界3——木版画」（2月3日〜2月22日）、道内美術界の現況を紹介する「北海道・今日の美術展」（3月4日〜3月26日）など盛りだくさんの展覧会が開かれる。

双生児対話　小川原　脩

美術館ニュース

北海道立旭川美術館

道立旭川美術館の昭和63年度の展覧会は、国内外のすぐれた美術作品を紹介するもの、木の造形作品や道北地方ゆかりの作家の作品を紹介するなど、多彩な内容となっています。

まず、木の造形シリーズの展賢会の一環として、6月25日（土）から7月31日（日）まで「北のハイカラ―すまいの美・くらしの意匠（かたち）」展が開催されます。北海道内の各都市、特に函館、札幌、小樽などには明治から昭和初期にかけてのすぐれた洋風建築が多く残されています。この展覧会では、その中から代表的な木造建築をとりあげ、屋根、窓、バルコニーなどの外観から、天井、壁面、照明、家具などの内部に至るまで、建築空間を構成するさまざまなデザイン要素に注目し、その造形の魅力を多角的に紹介しようとするものです。建築外部・内部の写真パネルや設計図、内部の家具、インテリア等多彩な内容となります。当時のハイカラなデザインの思いがけない魅力を発見できるでしょう。

8月6日（土）から9月15日（木）までは「自然をめぐる絵画の巨匠たち展―ブリューゲルからミレーまで―」が開催されます。16世紀フランドル絵画異色の巨匠ブリューゲルをはじめとして、風景画が独立したテーマとされるようになった17世紀オランダ絵画のヤン・ステーン、オスターデ、18世紀フランス絵画のヴァトー、19世紀バルビゾン派のミレー、コローなどの油彩画、素描、版画約100点が紹介されます。ヨーロッパ絵画の巨匠たちが自然という大きなテーマにいかに真摯にとりくんできたかということをうかがうことができるでしょう。

9月23日（金）から10月23日（日）までは、旭川ゆかりの彫刻家中原悌二郎の生誕100年を記念して「生誕100年記念　中原悌二郎とその友人たち」展が開催されます。中原は日本近代彫刻史上の最も重要な一人として知られており、多くのすぐれた作家と親交しながら「若きカフカス人」をはじめとする名作を生み出しました。この展覧会では、中原の彫刻、油彩、素描の他、萩原守衛の「女」、中村彝（つね）の「帽子を被る自画像」、高村光太郎の「手」など中原に大きな影響を与えた作家たちの彫刻、油彩画等、計約70点を紹介します。中原の芸術の全貌を理解するとともに日本近代美術を担った重要な作家たちの作品に触れることのできる絶好の機会といえるでしょう。

10月29日（土）から12月11日（日）までは、「ガラスの美―アール・ヌーヴォーからアール・デコへ」展が開催されます。北海道立近代美術館の所蔵品を中心に19世紀末から20世紀前期にかけて花開いたヨーロッパ各国のガラス工芸の多彩な美の世界を紹介します。エミール・ガレ、ルネ・ラリックをはじめとする約100点の作品により華やかなガラス工芸の数々をお楽しみ下さい。

以上の展覧会のほか、「イメージ・動　北海道の美術'88」（5／15～6／19）、「子どもと親の美術館'89」（2／25～3／26）が道立近代美術館から巡回されます。また、当館のコレクションの特色である木の造形作品や道北ゆかりの作家の作品は、「所蔵品展―道北の美術・木の造形―」（4／5～5／8）や「所蔵品展―四季を描く／木の美・現代の造形）（2／17～2／19）で紹介されます。今年も道立旭川美術館で楽しく充実したひとときをお過ごし下さい。

（新明英仁　道立旭川美術館学芸員）

若きカフカス人　中原悌二郎

美術館ニュース

北海道立函館美術館

北海道立函館美術館は、昭和61年９月に開館し、今年で３年目を迎えます。この間、一人でも多くの方々に親しんでいただけるよう、身近な美術館をめざして、わかりやすい展示と教育普及活動に力を入れてまいりました。

今年は青函トンネル開通の年であり、北海道と本州のより活発な人と文化の交流が始まる年とも言えましょう。地元函館では、７月開催の青函博をメインイベントに多くの催しを予定していますが、当館でもこの記念すべき年に合わせ、一層充実した多彩な展覧会を企画しています。

今年度、最初の展覧会は、はや今回で５回目を数える「イメージ　北海道の美術展」です。今年は「動」をテーマに北海道在住の79作家が腕をふるった新作を一堂に展示します。「イメー・動―北海道の美術'88」（４月２日から５月８日）、この展覧会のあとは、昨年の岩船修三展に続く道南ゆかりの作家の回顧展で、今年は函館在住の油彩画家、橋本三郎画伯にスポットをあてた「心象へ翔ぶ　橋本三郎展」（５月14日～６月19日）を開催、油彩ほか約80点により橋本三郎独自の心象世界へご案内します。

函館の観光シーズンであり、青函博の会期にも重なる６月25日からは、巨匠フランス・ハルスを中心に、17世紀オランダ絵画を紹介する「17世紀オランダ絵画の黄金期展」（６月25日～７月24日）、そしてベルギーのアール・ヌーヴォー芸術を展望する「世紀末の華　炎のアール・ヌーヴォー展」（７月30日～８月28日）を開催します。

９月に入ると「豊穣なるインド美術展（９月３日～10月10日）が始まります。インドにおける人間と動物のさまざまな関係を、絵画、彫刻、工芸品など、古代から近代にいたる約140点の作品で展望し、豊かなインド美術の世界を紹介します。このあとは、松前町出身の書家、金子鷗亭が蒐集した東洋美術と書のコレクションを系統的に展示する「鷗亭コレクションのすべて　東洋美術への招待」（10月15日～11月23日）に続きます。

そして貸館の第43回行動美術展（11月29日～12月４日）をはさんで、12月からは、日本のすぐれた絵本20冊から選りすぐった原画1200点によって、絵本の美にふれる「冬のおくりもの　絵本原画展」（12月10日～12月24日）を開催、年明けの１月５日からは、「描かれた文字／書かれた絵」（１月５日～２月19日）を予定し、現在その準備を進めています。言葉として読むことのできる「絵」と絵のように描写される「大字」（例えば現代書など）に焦点をあてた、今年度の展覧会の中でも特にユニークな企画です。海外の作品も交え、広い視野で絵画と文字の関わりを考えます。

今年度最後は、「愉快なカップ大集合」「1920年代の青春―函館のモダニスト・山本行雄と〝アクション〟の友人たち」（いずれも２月25日～３月26日）でしめくくります。

常設展示室では、春夏秋冬の四期に分けて、田辺三重松をはじめとする道南ゆかりの作家の作品、そして鷗亭コレクションを順次展示し、紹介していきます。

これら展覧会活動に合わせて、美術講演会や講座、映画会、そしてホールでのミニ・コンサートなどの企画も盛りだくさんに計画しています。今年度も、多くの方々にお越しいただけるよう願ってやみません。

J．C．フェルスブロンク
「ハーレムの『聖霊の家』の女性理事たち」1642

財団法人札幌彫刻美術館

第４回北の彫刻展

―北海道の彫刻家たち・730日の軌道―
８月24日（水）～10月２日（日）

北海道在住の彫刻家のすぐれた彫刻作品を広く紹介することを目的に、開館以来隔年で開催してきました「北の彫刻展」も今年度で４回目となります。この展覧会は、表現方法・材質など一切の規制をあえて設けず、北海道内において第一線で活躍している約20名の作家の自由な作品発表の場です。「730日の軌跡」とありますように、730日――約２年間の彫刻家による制作の軌跡を一望しようとするものです。これは、とりもなおさずこの２年間の道内における彫刻界の動向や移り変りの一つの縮図が、宮の森の当美術館の館内と彫刻庭園につくり出されることでしょう。

当館では、このほか年２回常設展の展示替えを実施し、当館に収蔵の本郷新を中心とした収蔵作品の紹介につとめています。

また、美術館コンサートも随時開催します。今年度第１回目としまして、５月18日（水）「バリトンとフルートと三十弦の夕べ」を開催する予定となっております。

そのほか、６月７日（火）には、ハンガリー・ブタペスト生まれのフランスの彫刻家ピエール・ゼッカリー氏を招いて講演会を、美術館友の会が中心となって当館研修室で開催する予定になっております。

美術館ニュース

北海道立三岸好太郎美術館

「記念館」から「美術館」へ

三岸美術館は、これまで三岸好太郎作品の常設展示を中心に活動してきましたが、昭和63年度から年２回の特別展示事業を行なうことになり、その準備が進められています。

「特別展示」は、大規模な展覧会ではありませんが、常設展示の一部を用いて、他の美術館や所蔵家から借用した作品を展示する小企画展です。すでに一昨年から館外のすぐれた三岸作品を順次紹介するために行なわれており、第１回は＜女の顔（絶筆）＞（1934）ほか２点、第２回は＜金魚＞（1933）、第３回は＜白百合＞（1932）がそれぞれ公開されました。さらに昨年、開館10周年の記念事業として行なわれた「特別展示・岸田劉生と三岸好太郎」では、初めて三岸好太郎以外の作家の作品が展示室に登場,好評を博しました。

63年度から行なわれる予定の「特別展示」は、過去３回の三岸作品の特別展示の実績のうえに、昨年の10周年記念特別展示の成果をふまえて、昨年と同規模の事業を年２回実施しようというものです。

「特別展示」年２回開催が通例となれば、これによって三岸美術館は質的な転換を遂げることになります。三岸好太郎の作品を常設展示するだけの「記念館」的な活動に加えて、他作家の作品の展示をふくむ多彩な企画を展開する行動的な「美術館」へ生まれ変わるのです。63年度に予定されている「特別展示」の概要を紹介しましょう。

春の特別展示「花と好太郎」5.28.～6.29.

作風とともにモチーフもめまぐるしく変わっていった三岸が、変わることなく描き続けたものに花があります。ロマンチストであった好太郎にふさわしい題材ですが、その作風は当然ながらさまざまに変化していきます。

今回は館外に所蔵されている三岸の花の絵の中から５点（いずれも個人蔵）を選び、館蔵の５点（うち１点は受託作品）とともに紹介する予定です。かなり写実重なものから抽象風、幻想風のものまで、三岸の感覚の鋭さと豊かさを味わっていただけると思います。

秋の特別展示「関根正二と三岸好太郎」10.1.～11.6.

関根正二は、1899年福島県に生れ、９歳のとき上京、15歳ころから絵を描きはじめますが、結核のため、1919年わずか20歳で亡くなりました。彼の鋭い色彩感覚と繊細な線描による表現は、悲劇的な彼の人生とともに、深く見るものの心をうちます。

同じ夭折の画家であった三岸は、関根が亡くなってから上京していますから、ふたりは直接会ってはいません。しかし、上京後まもない三岸の作品＜横向き少年＞（1922年ころ）には、色彩や構図の点で、関根正二との驚くべき共通性を見ることができます。また、三岸が中国旅行で得たモチーフの一つと思われる一連の中国婦人像は、関根の＜信仰の悲しみ＞（1918年）や＜神の祈り＞（1918年ころ）の構図にたいへんよく似ています。

今回の特別展示では、こうした二人の共通点を足がかりに、ともに若くして世を去った天才的な画家の足跡をたどろうとするものです。＜神の祈り＞（前出）、＜子供＞（1919年）ほか数点出品予定。

たんけん美術館'88　8.2.～8.21.

「これは何だ？」「どうやって描いたのかな？」

昨年、試験的に実施して得たクイズ形式の子供向けプログラムです。

三岸の作品は、子供には理解しにくいように思われるかも知れませんが、画面の具体的な特徴やモチーフを糸口に、子供なりの理解や感動を導き出すことは不可能ではありません。

この企画は、子供たちがガイドシートに従って館内を一巡しながら、めざす絵を探したり、絵の内容を考えたりすることができるようになっています。

美術コンサート

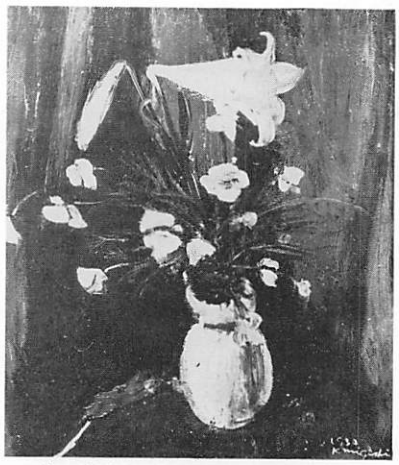
好評のうちに13回目を数えた美術館コンサートは、今年も素晴らしいプログラムと演奏でみなさんの眼と耳を楽しませてくれることでしょう。

ビデオプログラムを一新

多目的会議室でいつでもご覧いただいているビデオプログラムを、新しく製作したものと入れ替えます。

新年度から有料に

「記念館」から「美術館」に生まれ変った三岸美術館は、さまざまな活動を展開するためにも、入館者の方々に最小限の負担をしていただかなくてはなりません。そこで、63年度から観覧料をいただくことになる予定です。くわしけは美術館にお問い合わせ下さい。



花の静物――白百合　三岸好太郎